

令和元年6月24日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04678

研究課題名(和文) 子どもの描画における「9、10歳の節」に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on "turning point at the ages of 9 or 10" in children's drawing

研究代表者

栗田 真司 (KURITA, Shinji)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：00195554

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：描画表現意欲が低下する要因に関して、個別面接と描画テストによってモデル化した。描画表現に関して意欲が低下している子どもは、見ないで描くことよりも見て描くことが苦手である。描画表現に関して意欲が低下している子どもは、人物、特に顔を描くことが苦手である。描画表現に関して意欲が低下している子どもは、見ないで描いた自画像と見て描いた自画像が類似する傾向がある。描画表現に関して意欲が低下している子どもは、自分が書く字を「きれい」だと思っていない傾向がある。描画表現に関して意欲が低下している子どもは、図画工作科自体にも意欲をなくしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の学校教育は、常に美術教育の中柱として描画を位置付けてきた。描くことがすなわち美術教育でもあった。小学校図画工作科にA表現(1)として造形遊びが登場してから、造形遊びの位置付けは増し、絵に表す内容は減少しているが、描画は、現在でも小学校図画工作科及び中学校美術科の「表現」領域の内容に関わる基幹的内容である。したがって子どもたちが描かなくなることは、図画工作科と美術科の存在意義や系統性という点からも重要な課題と考えられるが、現在までの状況の調査ならびに対応する指導方法の研究は不十分である。本研究は、これらの諸説の検証や根拠となる資料として貢献できると考えている。

研究成果の概要(英文)：The factors that reduce children's desire to express drawings were modeled through individual interviews and drawing tests. Children who are less motivated to draw are less able to draw by sight than by not seeing. They are not good at drawing portraits, especially faces. When they drew their hands without looking at them, they were found to be in a situation where left and right were reversed and the number of fingers was not correctly expressed. They may not have been able to acquire a schema that stores images as images. Self-portraits were drawn without seeing tend to be similar to those drawn with seeing. Rather than drawing by measuring the length or angle of the motif line in front of you, you may be drawing a captured schema. In addition, as a result of protocol analysis during drawing, children with reduced motivation for drawing expressions were drawn using words indicating schemas such as and more frequently than instructional words such as "This" and "here".

研究分野：美術科教育

キーワード：9歳の節 描画表現意欲 プロトコル分析 感性アナライザ 図画工作科

1. 研究開始当初の背景

子どもは、幼児前期（1～3歳）の頃から発話表現と同様に scribble のような描画表現を始める。その後、生涯のうちで最も大量にまた主体的に描画活動を行う前図式期、図式期を経て、おおよそ9～10歳を迎えた頃、描画に対する表現意欲の低下傾向が発現する。いわゆる「9歳の節」や「10歳の節」と呼ばれる現象である。

これに対して日本の学校教育は、明治5年の学制頒布以来、現在まで常に美術教育の中柱として描画を位置付けてきた。描くことがすなわち美術教育でもあった。小学校図画工作科にA表現(1)として造形遊びが登場してから、造形遊びの位置付けは増し、絵に表す内容は減少しているが、描画は、現在でも小学校図画工作科及び中学校美術科の「表現」領域の内容に関わる基幹的内容である。したがって子どもたちが描かなくなることは、図画工作科と美術科の存在意義や系統性という点からも重要な課題と考えられるが、現在までの状況の調査ならびに対応する指導方法の研究は不十分である。たとえば表現意欲の低下した子どもの出現率を示すといった定量的な統計調査は数少ない。3つの美術教育関係学会の学会誌論文には、この20年間1本も掲載されていない。描画表現意欲が低下する原因は何かという質的な研究にいたっては日本の美術教育史上、皆無と言ってもいい状況にある。

フランスの児童画研究者 G.H.リュケは、10歳をそれまでのように知っているものを描く知的写実の時代から、実際に見ているものを描く視覚的写実の時代へと質的に転換する時期と位置付けた(G.H.リュケ『子どもの絵 児童画研究の源流』金子書房、1979年)。日本では、創造美育運動の指導者の一人であった北川民次が、この運動の最初期である1952年に「10歳以後の児童美術教育」という論文を発表するほど当初この問題に関心を示していた(北川民次「10歳以後の児童美術教育」、『創造美育パンフレット2』創造美育協会、1952年)。アメリカにおいても国際芸術教育学会の会長を務めたエリオット・アイズナーや認知心理学者のハワード・ガードナーが、この問題に触れている。しかし、それらの研究はどれも客観的なデータを伴わない直観的な論考である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、描画活動における「9歳の節」や「10歳の節」に着目し、描画への表現意欲が低下する要因(描画内容、指導法、描画材料、環境など)について定性的な個別調査によって明らかにすることである。

3. 研究の方法

描画は、見て描く、経験したことを描く、想像して描くなど内的過程によっていくつかに分類することができる。また、人物、風景、想像物など描く対象によっても分類できる。描画材料によっても分けることができる。これらの活動の何がどのような理由で表現意欲を低下させているのかを特定する。特に意欲という内的な概念を感性アナライザによる脳波測定や心拍数測定によって外在化し分析した。

本研究の一部は、エスノメソドロジーに代表されるいわゆる質的研究の視点に立って進めている。これを遂行するためには、質的な研究手法とカウンセリングマインドが必要であるが、研究代表者は、質的心理学を専攻し、大学でも研究会を組織して質的研究手法についての吟味を重ねてきた。なおかつ臨床心理カウンセラー(日本臨床心理カウンセリング協会)としてカウンセリング業務を行っており、子どもの発話や行動を読み解く臨床心理研究を日常的に行っている。

意欲については、「好き」「興味」「集中」「眠気」「ストレス」の5つの状況を脳波によって分析できる感性アナライザを用い、描画時の子どもの内的状態を計測する。同時に心拍数の計測も実施して関連的な分析を行う。研究代表者は、大学院修士・博士課程在学中に国立中野病院で脳波測定器やPET(ポジトロン・エミッション・トモグラフィ)を用いた研究に従事しており、脳波分析の経験があるが、今回の機器を用いるのは初めてであり、データ解析に関しては、機器開発機関である電通サイエンスジャムの協力を得た。

また従来の描画研究は、結果所産である描画作品を研究対象とするものが中心であったが、本研究は、結果(作品)ではなく内的過程に着目し、そこで用いられる各自の制作方略 strategy や対象の認知過程、また途中に消去された線形を再現して工程を外在化する点にも特色がある。

この研究によって、発達の断層の時期を迎えた子どもたちに対し、支援方法や主題の適正化によって対応が可能だとする立場を支える基礎情報が得られる可能性がある。

4. 研究成果

描画表現意欲が低下する要因に関して、個別面接と描画テストによってモデル化した。内容は、(1)描画内容、(2)指導法、(3)描画材料、(4)環境の各観点からなるものである。

(1) 描画内容

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、見ないで描くことよりも見て描くことが苦手である。ストレス指数も高い傾向にある。

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、人物、特に顔を描くことが苦手である。ストレス指数も高い傾向にある。

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、図1、図2のように見ないで描いた場合、左右が逆になる、指の本数が正しく表現できないなどの現象が認められた。画像によるスキーマの獲得ができていない可能性がある。

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、図3、図4のように見ないで描いた自画像と見て描いた自画像が類似する傾向がある。目の前にある対象物(モチーフ)の線の長さや角度の計測によって描くのではなく、獲得されたスキーマを持ち出して描いている可能性がある。

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、思考口述法中のプロトコル分析の結果、「この」「ここ」などの指示語よりも、「口」や「鼻」などのスキーマを示す言葉を発して描いていた。

(2) 指導法

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、教師、同級生、家族から作品、あるいは制作の過程において掛けられた言葉掛けについて詳細に記憶している傾向がある。幼稚園での出来事を記憶している子どももいた。

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、「～しなさい」という威圧的な言葉や威圧的な教師を嫌がる傾向がある。

(3) 描画材料

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、鉛筆で下書きした後に水彩絵の具で着彩する活動について、苦手だと考えている。

(4) 環境

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、自分が書く字を「きれい」だと思っていない傾向がある。

・描画表現に関して意欲が低下している子どもは、図画工作科自体にも意欲をなくしている。

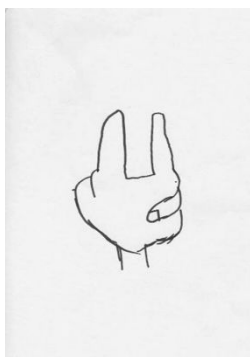


図1.見ないで描いたチョキ手(児童A)



図2.見て描いたチョキ手(児童A)



図3.見ないで描いた自画像(児童B)



図4.見て描いた自画像(児童B)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

(1)栗田真司、学術研究出版、子どもの心を育てるコミュニケーション、2017、212

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。